

カント 『オプス・ポストゥムム』 第十束、第十九紙葉、
一頁－四頁 (AA XXII 409.11-421.30)¹

内 田 浩 明・田 中 美 紀 子 訳

Kant's *Opus postumum*, Xth fascicle, sheet XIX, pages 1-4
(AA XXII 409.11-421.30)

Hiroaki UCHIDA, Mikiko TANAKA

第十束、第十九紙葉、一頁²

空間と時間は、知覚（意識を伴った経験的表象）の対象ではなく、（アプリアリな）純粋直観の対象である。空間と時間は、物自体（それ自体の存在 *entia per se*）、すなわち表象の外に現実存在する何かあるものではなく、主観の作用として主観に属するものであり、その作用を通じて主観は自己自身を定立する、すなわち自己自身を自らの表象の対象にするのである。

空間と時間は、直観であり、意識を伴ったすべての経験的表象に先立つ。それらは、同一律に従う分析的原理ではなく、むしろ総合的命題を提供し（提示し *exhibere*）、この総合的命題はアプリアリに（すなわち、その絶対的³必然性の意識とともに）経験の根底に存している。

注1 一なる空間と一なる時間のみが存在するという命題は、そのような総合的命題である。諸空間や諸時間について語られる場合、そのことで理解されているのは、同一の空間の諸部分やすべてを包括する同一の時間の諸部分であるにすぎない。

注2 客観的には一なる経験が存在するだけであり、諸経験について語ることは誤った理解である。というのも、諸経験ということで考えられているのは、【410】たがいに結合して一つの体系をなすかぎり、一なる⁴同一の経験に属している諸知覚にすぎないからである。さらには経験とは、与えられるもの、単に把握（把捉 *apprehendieren*）されるものではなく、主観によって作られるものである。

注3 空間と時間の両者は、つねにより大きな全体の部分としてのみ表象されねばならないという独特のあり方をしている。すなわち空間と時間は、その量が無限なものとして表象される純粋な感官の直観の対象である。

注4 空間と時間は、物自体（それ自体の存在）ではなく、現象、すなわち知覚の把捉されうる対

象の主観に対する関係にすぎない。ただし、主観が自己自身に及ぼす影響によって、もしくは外的対象からの影響によって触発されるかぎりであるが。現象における対象は、形式的なものに従ってア prioriに与えられることができる。そのことによって、以下の超越論哲学の本質的な課題、いやそれどころか超越論哲学自身が成立しうるのである。すなわち「いかにしてア prioriな総合的認識は可能か」。この命題は物自体と現象における物との区別にもとづいている。

空間と時間における多様な現象を総合する原理として、直観の多様を統合すること（結合すること〔総括すること〕complexus⁵）とは、現象を形式的なものとしてア prioriに描出することである。

空間と時間は、直観の対象（把捉可能なもの）ではなく、直観そのものである。というのも、さもなければ空間と時間は、知覚（意識を伴った経験的表象）の實在的な所与 dataとなり、直観が一つの原理によって基礎づけられるまえに、感官を触発するもの（表象の質料的なもの）を与えられたものとして前提することになるだろう。その原理に従って、多様な表象の統合は、ア prioriにあらかじめ与えられなければならない直観において【411】意識の統一（表象の形式的なもの）へと〔もたらされる〕（形式が物の存在を与える forma dat esse rei）。〔中斷〕⁶

〔余白上部右〕⁷

その現実存在は内属ではない。Cuius existentia non est inhaerentia⁸]

それ自体の存在〔=物自体⁹〕は他のものの規定ではない存在である（内属の反対）。Ens per se, est existens quod non est determinatio alterius (oppositum inhaerentiae) [10]

自己自身による存在は、他のものの結果ではないものである。Ens a se est quod non est causatum alterius.

厳密な意味における世界。Mundus in sensu stricto.

経験的直観一般の対象としての空間は、限界づけられていない唯一の全体であり、可能的知覚の客観である。

1. 概念にもとづくア prioriな総合的認識はいかにして可能か。2. 直観にもとづくア prioriな総合的認識はいかにして可能か。

牽引的な流体物質が存在し、そして反発的な流体物質も存在する。あるいは牽引すると同時に反発もするような〔性質をもつ〕物質が存在する。

経験から抽象された（医学の）普遍的な原則なるものは自己矛盾である。

生命体はつねに自らの運動において自己自身を作り上げる物体である。

生命のある物質などけっして存在しない。

総合的命題とは何か。ア prioriな総合的命題とは何か。いかにしてア prioriな総合的命題は可能か。超越論哲学とは何か。超越論〔哲学〕によっていかにして自然科学の形而上学的原理から物理学への移行は起こるのか。知覚の集合 Aggregat から第一に経験の可能性への前進が、第二に〔実質

的な] 経験への前進、すなわち物理学への前進が〔起こる〕。

主観は、空間と時間において直観の多様な全体へと自己自身を構成するが、経験的直観において与えられる実在的なものを把握することによってではなく、【412】一つの無限な全体としての全直観の総合的統一の形式的なものを把握することによって〔そうするの〕である。

知覚の統一の原理によって経験へと接近することは、なるほど可能ではあるが、しかし経験からは何も導き出すことはできない。なぜなら、経験的なものの汎通的規定は知覚の統一の原理に属しているからである¹¹。経験一般の可能性の原理、すなわちアプリアリな総合的統一の汎通的規定の原理。

〔余白下部〕

対象から触発されるさまざまな仕方、すなわち感官の影響の受容性のさまざまな仕方は、対象がわれわれに現れなければならないような仕方を体系的に規定し、しかもすべての知覚に先立って規定する。私の自己意識、〔すなわち〕悟性は、このような直観を〔自らのうちに〕持ち込む。

形式的なものに従った直観の受容性、すなわち現象における受容性、および一なる概念における統合(把握)の意識の自発性は、超越論哲学のアプリアリな総合命題のはたらきであり、このはたらきによって主観は現象として、自己自身に¹²アプリアリに与えられるのである。客観 $=x$ ¹³は、物自体である。現象における物の相関者は、物自体であり、主観である¹⁴が、その主観を私が客観となす〔=客観にする〕のである。

物自体(それ自体の存在)の概念は、¹⁵あらかじめ与えられたもの、つまり現象における客観からのみ生じる。したがって物自体の概念は、客観が〔現象との〕関連において、しかも消極的な関連において考察される関係から生じる。

空間自身は、客観がいかにして主観によって思惟されるのかではなく、いかにして主観に対して与えられるのかという関係の形式的なものにはかならない。

もしわれわれが権力保持者としての神の概念を経験から作ろうとするならば、神のすべての道徳性は除去され、専制のみが残るのであろう。

【413】第十束、第十九¹⁶紙葉、二頁

認識の第一の作用は、私は存在するという動詞 Verbum、つまり自己意識である。そこでは私は、主観として私自身に対して客観である。ところで、この点にすでに主観のいっさいの規定に先立つ関係が、つまり直観の概念への関係が存しており、その場合、私が私自身を定立することによって、自我は二重に、つまり二通りの意味に理解される。すなわち、自我は一方では物自体(それ自体の存在)として、〔しかし〕第二に直観の対象として理解される。しかも客観的に現象として理解されるか、それとも私自身をアプリアリに一つの物へと構成するものとして、すなわち事象自体そのものとして理解されるかのいずれかである。

自己自身の意識（統覚 *apperceptio*）は、それによって主観が自己を総じて客観たらしめる一つの作用である。自己自身の意識は、まだいかなる知覚（単純把握 *apprehensio simplex*）、すなわち、いかなる感官の表象でもない。そのためには、主観が何らかの対象によって触発され、直観が経験的になる必要がある。むしろ自己自身の意識は、純粹直観であり、この純粹直観は、空間と時間の名のもとに、直観の多様を統合するはたらきの形式的なもの（等位関係、そして従属関係）だけを含む。このようにして純粹直観は、直観の多様の総合的認識のアプリオリな原理を含んでいる。このアプリオリな原理は、しかしまさにそれゆえに現象における対象を表すのである¹⁷。

直観の多様は、現象における対象を表すのか、それともそれ自体であるものに従った対象を表すのか。直観の多様に関するこうした区別が意味するのは、形式的なものが単に主観的に、すなわち主観に対して妥当すると考えられるべきか、それとも客観的に、〔すなわち〕誰に対しても妥当すると考えられるべきかどうかという区別だけである。そしてこのことは、はたして措定〔=定立〕Position が名詞を表すのか、それとも動詞を表すのかという問いに帰着する。

三次元を有する空間の直観、および次元を有する時間の直観は、アプリオリな総合的命題を原理として与えるが、それは感官の客観にとっての原理としてではない。というのも空間と時間は、直観に（経験的に）与えられる把握可能な物などではないからであり、意識を伴った空間と時間の表象は知覚ではないからである。同様にまた、【414】 そのように知覚と誤信されたものの集合の体系は経験ではない。むしろこの体系は、直観の全体であり、それは客観的には単に現象であるが、この直観の全体には物自体としての対象がもつばら理念において対応していると考えられる。

空間と時間は、主観の外に現実存在しているものでも、ましてや物の内的規定でもなく、単に思考物 *Gedankendinge*¹⁸（思考上の存在 *entia rationis*）であるにすぎない。

何より重要なのは以下のことである。空間と時間、そして空間と時間における対象は、未規定だが規定可能な直観において、つまり現象において与えられており（与えられうるもの *dabile*）、そしてこれらのものが可能な全体として思惟される（思惟可能なもの *cogitabile*）。しかし、この両者〔与えられうるものと思惟可能なもの〕が一緒になって〔はじめて〕アプリオリな総合的命題のための原理を基礎づけるのであり、その原理が超越論哲学と呼ばれる。またこの原理は、自然科学の形而上学的原理から〔物理学へ〕の移行を可能にする。この移行を通じて、主観は物理学のために自己自身を経験の対象へと構成するのである。物理学は、汎通的規定を経験から開始するのではなく、むしろ知覚の体系としての経験のために汎通的規定を開始する。——直観の主観的なものは、直観の形式的なものとしては現象における対象である。それは、現象における対象がかのアプリオリな総合的命題の原理に従って総合的表象からアプリオリに生じるのと同じである。物自体は、こうした多様なものの全体を結合して統一へとたらしめる〔のに必要な〕思考物であり、主観はその統一を目指して自己自身を構成する。対象自体 = *x* は、あるがままの *an sich* 感官の客観そのものであるが、〔感官の客観とは〕別の客観としてあるのではなく、別の表象の仕方としてある。

〔余白上部左〕

直観の総合においては、意識を伴った経験的直観（知覚）から始めることはできない。なぜなら、その場合には形式が欠けているだろうから。それゆえ、直観における形式的なもののアプリアリな原理から出発して経験の可能性の原理へと進んでいく。つまり、経験からはなお何一つ汲み取らずに、自己自身を定立する。

空間と時間における意識〔されたもの〕のすべての現実存在は、もっぱら内的および外的感官の現象であり、そのような現象として直観の総合的原理がアプリアリに成立する。そして〔主観は〕空間と時間における現実存在する物として自己自身を触発する。ここでは主観は、自発性を含んでいるがゆえに【415】物自体である。現象は受容性〔の結果〕である。物自体〔としての主観〕は〔現象と区別された〕別の客観ではなく、自己自身を客観たらしめる別の仕方である。〔それゆえここでは〕可想的客観 *objectum noumenon* ではなく、むしろ感官の直観の客観を単なる現象体たらしめる悟性の作用が、可想的客観なのである。

空間¹⁹は、アプリアリに与えられたもの（与えられうるもの）であり、すなわち単に直観の対象であるだけでなく、直観そのものであり、単に思惟可能な対象なのではない。空間は、存在者 *Ens*（現実存在するもの）でもなければ非存在者（思惟不可能なもの）でもなく、一個の可能性の原理である。

感官によって認識されるべきもの、すなわち知覚されるべきものは、われわれの感官を触発しなければならない。そして、その触発から発源する客観の直観は現象（物自体）である。

空間は、知覚可能なもの（知覚の対象、すなわち意識を伴った経験的表象）ではない。空間は、また思惟する主観の外に与えられたものではなく、むしろわれわれのうちにある表象の集合体にすぎない。〔空間は、〕その概念のうちに矛盾を含むものは、ものであるとは言えないが、しかし無であるわけでもない。そして物に対して空間だけは存在するが空間を満たすものが存在しない場合には、何ものも〔中断〕。

普遍性 *Vniversalitas allgemeinheit*

総体性 *Vniversitas Allheit*

現象における物に対応する物自体は、単なる思考物であるが、しかしいかなる架空物 *Unding* などではない。

第十束、第十九紙葉、三頁²⁰

われわれのすべての認識は、直観と概念の二つの要素から成り立つ。この二つの要素が、アプリアリにわれわれのすべての認識の根底に存する。そして悟性とは、直観と概念を結合して、多様な認識を主観において統一する形式である。この形式により、主観的に思惟されたものが、客観的に与えられたものとして表象されるのである（思惟可能なものは、そのかぎりでも与えられうるものである。*cogitabile quatenus est dabile*)。

直観の対象の表象から概念へと進み、しかも〔直観と概念の〕相互的關係によって進む第一の作用は、こうした諸表象の関係を総合的統一へ構成する作用である。【416】（その統一とは、同一律に従

う論理的な統一ではなく、超越論哲学の原理、〔すなわち〕アприオリな総合的な認識の可能性の原理に従う形而上学的統一である)。こうした第一の作用は、多様なものを直観において与えられたものとして把捉する作用（単純把捉）ではなく、自己を現象において与えられたもの（現象的客観 *objectum Phaenomenon*）としての客観たらしめる自律の原理である。その場合、事象自体 = x（可想的客観 *objectum Noumenon*）は、思惟されたものにすぎない。〔だが、〕その思惟されたものは、対象を単に現象として、つまり対象を間接的に認識可能なものとして表すために〔必要であり〕、また、実在的な関係ではなく、そうした関係の単なる形式である空間と時間における対象の現実存在を、直観において表すために〔必要なのである〕。

すなわち、空間と時間は、物自体（それ自体の存在）ではなく、感官の表象である直観の多様を総合する場合の表象の総括の単なる形式であり、直観の多様の各々は無制約的な統一を含んでいる。〔つまり、〕一なる空間と一なる時間だけが存在する。そのいずれもが（消極的に無限な）ものとして、感官の多様な直観を〔含むが²¹⁾〕、知覚（意識を伴う経験的表象）ではなく、単に感官の表象におけるあらゆる関係の総括だけを〔中断〕

直観と概念は、物一般を表象する二つの様式である。その多様な物一般は、総合的な統一の原理に従って〔直観の〕多様を統合する形式的なものとして、あらゆる知覚（意識を伴う経験的認識）に先行して感官にアприオリに、すなわち純粋な直観として与えられ、そして悟性によって思惟されるのである。直観と概念はともに、純粋か経験的かのいずれかでありうる。純粋な概念は、あらゆる直観にアприオリに先行する原理である。純粋な直観は、（外的直観も内的直観も）、論証的原理に対応する、総合的であるかぎりでのアприオリな認識原理である。【417】——この二つの原理はともに超越論哲学に属し、空間と時間は超越論哲学の対象である。超越論哲学の対象は、こうした〔純粋な〕表象のうちでは現実存在する物として与えられていない（与えられうるものではなく、思惟可能なものである）。この対象は主観に内属し、現象の単なる形式的なものとして、多様な直観の一つの絶対的全体のうちで表象され、こうして無限なものとして表象されるのである。—— 一なる空間と一なる時間が存在する。

直観における表象の対象は、こうした客観の外で把捉可能な客観ではなく、対象の主観に対する関係である。つまり、直観における表象の対象は、物自体 = x としての対象ではなく、現象としての対象である。

〔余白下部〕

認識原理をなす二つの要素、すなわち直観と概念が存在する。そのうちの一つは与えられ、もう一つは思惟される。そして両者はたがいに分析的にではなく、（直観が概念に）総合的に従属させられ、認識のアприオリな原理を規定する。直観と概念のそれぞれが空間と時間という絶対的全体を規定し、空間と時間は一つの無限なものを形成する²²⁾（この無限なものは、等位という積極的な無限ではなく、概念に従う消極的な無限、すなわち無際限である）。

〔余白上部右〕

主観は、直観における多様の総合的統一〔のはたらき〕としての悟性を通じて、アприオリに自己自身を定立する。多様な直観は、空間と時間の表象のもと〔に置かれるだけ〕では、把握（統覚 *apperceptiones*）の対象ではない。

直観において与えられたもの（与えられうるもの）は、空間と時間、すなわち現象における対象である。この現象における対象が、アприオリな総合的命題を提供するのである。——空間と時間を含んでいる多様なものとともに空間と時間は、物ではなく、また物自体の規定でもない。そうではなくて、現象における対象の主観的な規定である。物自体 = x は、思考物（思考上の存在）であり、【418】物自体と現象の違いは、主観的な規定と客観的な規定の違いにすぎない。

ドリユクとズインマーが主張する、反発しあう電気の相違²³。ドリユクの場合はプラスとマイナスの電気、ズインマーの場合は a とマイナス a の電気（いずれも単に論理的対立ではなく、実在的対立である）。

〔余白右、下から三分の一〕

魂という言葉は、単に一つの生命ある実体、あるいは生気を帯びた実体を意味するだけではなく、別の実体（物質）を生気づけるものをも意味する。動物はすべて、（非物質的原理としての）一なる *Eine* 魂をもっており、さらに動物の諸部分は、それらが分離されても、なお一つの自己生命 *vita propria* であるということを証明しているように見える。——植物では接ぎ木が認められるので、植物は体系をなしていなくても集合体である。有機物の身体の中の神経と呼ばれる器官は、感覚の中樞であり、魂と呼ばれるが、その魂とは常に一なる魂であり、だから、たとえ身体が分割されても、別の原子がふたたび魂の仕事を遂行するのである。

〔余白下部右の角〕

まず第一に、われわれは、われわれ自身の直観の多様を定立し、そのかぎり第二に、われわれを触発するあるものを、われわれの外に、すなわち空間と時間における現象として定立する。〔そして〕第三に、悟性が一つの原理に従って、直観の多様を総合的に定立する。すなわち悟性は、一つの全体において直観の多様を統一へと結合し、汎通的規定へと進む。規定可能なものは物自体であり、この規定可能なものは、悟性によって与えられ、形式に従ってアприオリに総合的に定立されたもの（与えられうるもの）である。直観の多様は指定可能な *aBignabile* ものである。経験の可能性の原理（物理学への前進）。

第十束、第十九紙葉、四頁²⁴

1.（同一律に従う）主観としての私自身の意識、2. 直観と概念による自己自身の認識、3. 空間と時間における自己自身の定立——この定立は【419】アприオリな原理に従って起こり、直観の多様の共存と継起の単に形式的なものだけを含む。4. 直観は、純粹直観であるか経験的直観である

かのいずれかである。純粹直観のみが、感官の客観に対するアプリアリな総合的判断を含み、これとともに超越論哲学のテーマを含んでいる。すなわち、超越論哲学は「いかにしてアプリアリな総合的判断は可能か」という課題を含んでいるのである。²⁵《いいかえれば、空間と時間の直観表象によって、いかにしてアプリアリな総合的判断は可能か、という課題がそれである。空間と時間はいかなる客観でもなく、主観の自己自身による規定であり、主観はこの規定を通じて、現象における対象として自己を触発し、また主観は物自体=xとして自己自身の規定根拠である。

客観の汎通的規定は現実存在である。しかし、空間と時間は直観（認識）²⁶であり、それは、対象の現実存在を含まない表象ではなく、むしろアプリアリに与えられた総合の形式であるにすぎない。》

5. アプリアリな総合的判断はいかにして可能かという問いの解決は、以下の通りである。すなわち、アプリアリな総合的判断は、感官の対象が、物自体としてではなく単に現象としてのみ表象されるかぎりにおいてのみ、可能であるということである。——空間と時間における多様なものの現存在（与えられうるもの）は、多様なものを統合する形式的なものの条件に従う。しかし、それは現象として、つまり主観が触発される主観的表象様式として従うのであって、多様なものがそれ自身何であるかということに関して、それに従うのではない。というのも、この形式的なものについてのみ、アプリアリな総合的原理が可能だからである。知覚による経験的総合は、アプリアリな原理を何一つ提供できない。すなわち、空間と時間における関係の原理が持たなければならない普遍的なものを提供できないのである。

われわれのすべての認識能力は、直観と概念という二つの作用にその本質が存する。——両者は、純粹な、すなわち非経験的な表象として（なぜなら、経験的表象は感官、すなわち経験的表象をあらかじめ前提とする知覚への影響を必要とするので）、形成（species）と思考に基づく表象能力から生じる。そしてわれわれが、この表象の対象を定立する場所は空間と時間であり、空間と時間はいずれもそれ自身では実在性（現実存在）をもたず、むしろ主観に内属する形式（思考上の存在）にすぎないのである。しかしながら、空間と時間は量的関係【420】に従えば限界はないが、質的關係については、内的に無限の多様性を含んでいる。

直観と概念から成り立つすべての私の表象能力（*facultas repraesentativa*）は、自己意識から始まる。この自己意識は、まず同一律に従って解明的であり論理的と呼ばれるが、また、アプリアリな総合的認識の形而上学的原理でもある。それはつまり、拡張的でもある。そして主観が、現象においての対象にすぎない（経験的でない）純粹な直観としての空間関係と時間関係において、自己自身を定立することによって、つまり客観的ではなく、単に主観的に規定することによって、自己意識は所与の概念を超え出ていく。自己意識自体は、事物ではなく対象を直観する形式にすぎない。——ところで、超越論的な表象の仕方は、現象としての（対象を）直観するものである。〔これに対して〕超越論的な表象の仕方とは、単に思考上の存在、つまり思考物である物自体としての客観を表象するものであり、物自体とは、客観的ではなく主観的にのみ規定する無限（無限定）概念 *conceptus infinitus* (*indefinitus*) である。

われわれの感官の直観は、最初は知覚（意識を伴う経験的表象）ではない。なぜなら知覚には自己

自身を定立し、この措定を意識するという原理が先行するからである。そして、汎通的に結合された多様なものを定立する形式は、空間と時間（外的直観と内的直観）と呼ばれる純粋な直観であり、概念に従って無限定 *indefinita* なものとして、現象においては肯定的に無限なもの *infinita* として表象される。

自己意識は、1. 分析的原理に従えば論理的であり、2. 自己直観において与えられている多様なものの統合（結合〔総括〕*complexus*）においては形而上学的である。〔これはさらに〕 a. 概念によるのか、b. 主観の直観と数学的表象を形成する概念の構成によるのか〔のいずれかである〕。

注意せよ。超越論的哲学は、一つの完璧な体系においてアприオリな総合的命題の総括のみならず、概念の構成によるのではなく、概念にもとづくアприオリな総合的命題をも含んでいる。なぜなら【421】概念の構成によるのは数学であるから。すべてを満たし、すべてを透入しながら運動する物質の概念は、すでに次のことから明らかである。すなわち、このような物質がなければ空間は知覚されず、したがってまたいかなる客観も存在しないだろうから、ということである。

〔余白左、中ほど〕

（生命のある物質という言い方は矛盾を含んでいるが、）生命は、原初の創造力から分かれた実体に起因し、有機的物体はエーテルによって相互に関係し合いながら、より高次の器官と関係している。

われわれは、アприオリな総合的認識のみを問題にする。そして、空間と時間における直観の多様の統合を問題にし、観察者として、また同時に創造者としてわれわれは、われわれ自らが作り出す客観を問題にする。

われわれの表象が対象から働きかけられるのではなく、対象が表象能力とその総合に従うということ。

物自体 = x は単に思考物、詭弁的存在 *ens rationis ratiocinantis*²⁷ にすぎない。

動力学的能力 *Potenz*（特に引力）によってのみ可能であり、間接的機械であるところの機械的諸能力について。

現象としての直観の主観的なものは、アприオリな形式であり、物自体は = x である。超越論哲学。

1. 自己自身を定立すること。
2. 感官の直観に従って直観の対象を自己に経験的に定立するのではなく、空間と時間という形式的なものに従って直観の対象を自己にアприオリに定立すること。
3. すべての知覚に先立つ現象として主観的。
4. 一つの原理のもとで経験の可能性を含むアприオリな総合的命題（超越論哲学）

注意せよ。物自体 = x の表象と、物自体が主観に現われる仕方との区別。——与えられうるものと思惟可能なもの。両者合わせて表象可能なものとなる。同一律に従う（論理的な）統一と、（a

と非 a というような〔論理的〕対立ではなく、a とマイナス a という実在的反対あるいは実在的相関 *oppositio s. correlatio realis* である）形而学的な統一、しかも主観における統一。

- 1 AA はアカデミー版カント全集 (Immanuel Kant: *Gesammelte Schriften*, hg. von der (Königlich) Preußischen Akademie der Wissenschaften und ihren Nachfolgern, Berlin, 1900ff.) の略である。AA の後のローマ数字は巻数を表し、アラビア数字はページ数を表す。ページ数の後のピリオドの後の数字は当該ページの行数を表す。すなわち、本稿は同全集の第 22 巻 409 ページの 11 行目から同巻 421 ページの 30 行目までを訳出したものである。ページの変わり目は、【 】で囲んだページ数を本文中に挿入して記した。本文中の () はカントによる補足であり、[] は訳者による補足である。ドイツ語やラテン語の原語を記すさいには、原則として初出箇所限定し、() は用いなかった。全集の中で隔字体で強調されている箇所は、その日本語訳の隔字体上に点を打った。『純粹理性批判』(KrV と略記) から引用する場合は、慣例に従い、1781 年刊行の初版を A、1787 年刊行の第二版を B で表し、ページをアラビア数字で示した。
- 2 本翻訳箇所に該当する手稿には、カントによってインクで補遺五 (Beylage V) と記されている (本稿 154 頁の手稿の画像参照) が、本来は第十束ではなく、第七束に属するとされる (cf. Erich Adickes: *Kants Opus postumum dargestellt und beurteilt*, Berlin 1920, p. 92, p. 143)。実際に、第七束には補遺一から四 (Beylage I-IV) が含まれており (AA XXII 3.2-48.8)、補遺五 (Beylage V) も存在する (AA XXII: 48.10-65.16) が、その補遺五の中で述べられているのは、主に神の概念や、神と世界と主体としての人間との関係についてであり、第七束の中で重点的に扱われる「自己定立論」というテーマとは異種のものである。それゆえ、第七束の補遺五は、むしろ第一束に属すると考えられる。したがって、本稿で訳出した第十束の補遺五を、第七束の本来の補遺五とみなすのが正当であろう。そもそも本翻訳の元となった原典の紙葉の余白上部左に記された「第十束、第十九紙葉」(Bog. XIX des 10ten Convol) という文字は、カントによってではなく、他者の手によって鉛筆で加筆されたもので、この紙葉は、全集編集の際に間違っって第十束に収録されたと思われる (cf. AA XXII 409 Anm.)。また、そのすぐ右横には、やはり他者の手で XXII, 128 と記されている。
- 3 「絶対的」はカントによる同時期の追加。
- 4 eine und dieselbe から Eine und dieselbe と eine が大文字に訂正されている。
- 5 ラテン語の *complexus* は、もともとさまざまな文脈で用いられ、言い換えとしてカントによって付記されるドイツ語も一様ではない。ほぼ同時期に書かれた『オプス・ポストウム』の第十束では、総括 *Inbegriff* の言い換えとしての用例がもっとも多い (cf. AA XXII 298.23, 308.16, 310.25, 316.23f., 333.26f., 355.6f., 377.17f., 396.25 etc.)。今回訳出した箇所では、*complexus* に *Zusammenfassung* というドイツ語が付加されているので、*complexus* は結合 (あるいは総合的な統一) を意味すると考えられる。本稿では上記の用例も勘案し、*complexus* を「結合すること〔総括すること〕」(144 頁) ないしは「結合〔総括〕」(151 頁) と訳出した。
- 6 本文中に訳者によって挿入された〔中断〕は、カント自身の手による草稿の文章が中断されており、完全な文章の形をなしていないという意味である。
- 7 カントは一枚の紙にまとまった考えを記すのが常であったので、その紙の下まで書き進んだあとは、余白に続きや補足を書き加えていった。カントの手書き原稿を編集して刊行したアカデミー版全集の校訂注には、当該の草稿やメモが、その紙の余白のどの位置に書き記されているかが明記されている。本稿では [] の中に、その位置づけを補って記した。
- 8 次のスペイン語訳に従った。Immanuel Kant: *Transición de los principios metafísicos de la ciencia natural a la física (Opus postumum)*, ed. Félix Duque, Madrid 1983, p. 529.
- 9 本文で何度もあるように、カントは『オプス・ポストウム』において「物自体」をラテン語で *ens per se* と言い換えている。一方、『オプス・ポストウム』でほとんど言及されない *ens a se* との違いについては、第七束で次のように説明されている。「それ自体の存在と自己自身による存在との違い。前者は、他の客観によって触発されるところの現象における客観である。後者は、自己自身を定立し、(空間と時間において) 自分自身

- を規定する原理であるところの客観である」(AA XXII 33)。
- 10 Immanuel Kant: *Transición de los principios metafísicos de la ciencia natural a la física (Opus postumum)*, ed. Duque, ibid.
- 11 AA XXII 412の校訂注を参照し、ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミーのホームページで公開されているカントの手稿の画像を確認したところ、「属しているからである」のあとに「+」という符号があり、その12行上に再び「+」という符号があり、そのあとに「経験一般の可能性の原理」以下の文言がある。両者のつながりが一応示唆されているが、文法上はつながらないため別個に訳した。Cf. http://telota.bbaw.de/kant_op/ (2018年10月25日閲覧)。
- 12 アディッケスは、この「自己自身」を(物自体に対応する)「自我自体 das Ich an sich」と解釈している (cf. Adickes, op. cit., p. 652)。
- 13 x (あるいはX) は、カントが『純粹理性批判』で「未知なるもの」である「超越論的对象」(KrV, A109)と「超越論的主観」(KrV, A346/B404)に対して用いていた表現である。それゆえ、アディッケスは自身の著書の中では、当該箇所「超越論的对象」を補っている (Adickes, ibid.)。
- 14 アディッケスの読みに従った (Adickes, ibid.)。
- 15 アディッケスは「超越論哲学にとっては」という表現を補っている (Adickes, ibid.)。
- 16 余白上部にはカント以外の他者の手により鉛筆でXXII, 2と加筆されている。
- 17 アカデミー版の校訂注ではmachtのあとにenthältを補うよう指示されているが、これは、訳文「このようにして」から始まる文の動詞が、原文では欠落しているためである。実際、英訳でもそのように訳されている。Cf. Kant: *Opus postumum*, translated by Eckart Förster and Michael Rosen, Cambridge 1993, p. 180.
- 18 Gedankendingはカントの『純粹理性批判』をはじめとして、しばしば使われる言葉である (cf. AA II 377, KrV A337/B394, A447/B475, A566/B594, AA VI 292, 338, 442.)。直訳すれば「思想物」となるが、日本語としてはやはり不自然である。それゆえ「思惟の産物」「思惟物」「空想物」「想像の産物」等と訳されることもある。本稿では「思考物」と訳出した。
- 19 この文頭の代名詞Erは、前段落の「悟性の作用 der Act des Verstandes」と解するのが文法的には自然であるが、そうすると、『純粹理性批判』以来カントが堅持してきた彼の感性和悟性の説から大きく逸脱することになる。このため、英訳では「空間」とされており、本稿もその読み方に従った。Cf. Kant: *Opus postumum*, translated by Förster and Rosen, op. cit., p. 181.
- 20 余白上部右にはカント以外の他者の手により鉛筆でXXII, 3 29と記されている。
- 21 []内の補足は、英訳に従った。Cf. Kant: *Opus postumum*, translated by Förster and Rosen, op. cit., p. 182.
- 22 直訳すると、「空間と時間は一つの無限なもの(〔ただし、〕等位という積極的な無限なものではなく、概念に従う消極的な無限なもの、すなわち無際限のもの)を形成する。」となるが、()内の補足は、あくまで「無限なもの」の補足説明であるため、日本語としての読みやすさを考慮し、あえて本稿のように訳出した。
- 23 De Luc (=Jean-André Deluc (1727-1817))とRobert Symmer (1707-1763)についてはAA XIV 255, 484ff.参照 (cf. AA XXII 822)。なお両者の生涯や著作等に関しては、次の文献のそれぞれの該当箇所を参照。*The Dictionary of Eighteenth-Century British Philosophers*, general editors, John W. Yolton, John Valdimir Price and John Stephens, Bristol 1999, pp. 262-266, pp. 861-862.
- 24 余白上部左にはカント以外の他者の手により鉛筆でXXII, 4と記されている。
- 25 以下に《 》で囲んだ部分は、アカデミー版の校訂注によると、カントが「第二版」として余白の左側に書き記したものとされる (AA XXII 419)が、本稿では本文の中に引き込んで訳出した。
- 26 「認識」はカントによる同時期の追加。
- 27 AA V 468, KrV A 669/B 697, AA XXII 421, AA XXI 78等にも登場する。なお、カントが長年にわたり講義のテキストとして使用したバウムガルテンの『形而上学』第六十二節には「ENS FICTUM (rationis ratiocinantis)」という記述があり、バウムガルテンは原注で「虚構の物 ein erdichtetes Ding」とドイツ語で言い換えている。Alexander Gottlieb Baumgarten: *Metaphysica* (Editio VII, 1779), Hildesheim 1982, p. 17.

【訳者解説】

ここに訳出したのは、ドイツの哲学者イマヌエル・カント（1724－1804年）のいわゆる『オプス・ポストゥムム（Opus postumum）』（ラテン語を直訳すると「遺作」）の一部である。『オプス・ポストゥムム』は、本格的には1796年頃ⁱから1803年までにカントが執筆したと考証されている、草稿群の総称であり、プロイセン科学アカデミー版カント全集の第21巻（1936年）と第22巻（1938年）に収録されている。その総ページ数は両巻あわせて1300ページに及ぶ。『オプス・ポストゥムム』は、全部で13の束 Konvolut から構成されるがⁱⁱ、それらは執筆順に編集されることなくカント全集に収録されており、例えば第21巻の巻頭を占める第一束にはカントの最晩年に記されたメモや草稿が含まれている。『オプス・ポストゥムム』の翻訳は、フランス語（1950年、1986年）、イタリア語（1963年）、スペイン語（1983年）、英語（1993年）では抄訳がすでに刊行されているが、どの言語においても全訳は完成されていない。全訳の困難さの理由は、カントの草稿の全体量が多いこと、アカデミー版に収録された草稿群が成立順に編集されなかったこと、草稿がメモのようなものを多く含み、また、文章としてもカント自身により書き直しが繰り返され、文意が曖昧になった個所が頻出したことなどが挙げられるだろう。

『オプス・ポストゥムム』の内容としては、自然哲学や物理学に関連する草稿が大半を占めている。これは、カント自身が生前に「自然科学の形而上学的原理から物理学への移行」というタイトルのもと、その出版を考えていたからである。実際、「八折判の草案 Oktaventwurf」と呼ばれる最初期の草稿や、それに続く草稿群（A-C, $a - \varepsilon$, $a - c$, No. 1-No.3 η 等）でも同様に、「量、質、関係、様相」という「カテゴリーの手引き Leitfaden der Kategorien」に従って「物質の諸々の運動力」を説明しようとする試みがなされている（cf. e.g. AA XXI 311）。また、その後、1799年5月から8月の間に書かれたとされる草稿（Übergang 1-14、核心的部分は第五束の特に後半）では、「エーテル演繹 Ätherdeduktion」または「エーテル証明 Ätherbeweis」と言われる、『オプス・ポストゥムム』に特有の思想が展開されることになるが、そこではそれまでの諸著作や『オプス・ポストゥムム』で仮説的とされていた物質であるエーテル（あるいは熱素 Wärmestoff と呼ばれる）の現実存在を証明し、それを「可能的経験の全体ⁱⁱⁱの統一」（AA XXI 572）の原理に据えようとする試みがなされる。

このように、『オプス・ポストゥムム』は、執筆の年月を経るに従って、単に自然科学・自然哲学の枠内には収まりきれない問題をも含むようになる。例えば、上述の「エーテル演繹」の執筆活動は、3ヶ月程度で突如として中断され、1799年8月から1800年4月までに執筆されたとされる第十束と第十一束では、「いかにして物理学は可能か」という問いとともに、「いかにして経験は可能か」、「いかにしてアприオリな総合判断は可能か」等の認識論的・超越論的な問いが見られるようになり、しかもそれが主観と客観の運動力のみならず、客観による触発に加え、主観が自己自身を触発することによって可能であるとする「自己触発 Selbstaffektion」の観点から説明されるようになる。こうした傾向は、それに続く第七束と第一束ではさらに顕著になる。すなわち、第七束においては「空間と時間」、「物自体」、「自己定立 Selbstsetzung」が主題となり、その後、カントの死の前年である1803年まで書き綴られた第一束では「理論哲学」と「実践哲学」を統一する「超越論哲学の最高の立場 [= 観点]」

がメインテーマとなっている。

今回訳出した箇所は、アカデミー版カント全集では第十束に含まれているが、本文の注2でも示したように、もともとは第七束に属するとされる草稿であり、1800年の4月から12月の間に執筆されたと考えられている。事実、第十束で何度も扱われる「いかにして物理学は可能か」という問いはもはや背後に退き、「空間と時間」、「物自体」、そして「自己触発」、さらにその発展形態としての「自己定立」に関する叙述が前面に押し出されるようになる。「空間と時間」、「物自体」に関する説は、カントの批判哲学の核心とも言うべき超越論的観念論にとってきわめて重要であり、『純粹理性批判』（初版1781年、第二版1787年）およびそれ以降の諸著作で何度も扱われてきたが、『オプス・ポストウム』の第七束でも繰り返し議論されるに至ったのである。

これに対して、「主観が自己自身を定立する」（本稿143頁、145頁等参照）ないしは「主観が自己自身を客観たらしめる」（本稿145頁、146頁等参照）という「自己定立」に関しては、『オプス・ポストウム』の英訳者の一人であるフェルスターが、『オプス・ポストウム』の「白眉 culmination」と評するようにⁱⁱⁱ、カントが「アプリオリな総合判断」、「経験一般の可能性」の超越論的原理として、『オプス・ポストウム』においてはじめて明確に繰り返し述べた^{iv}概念である。また、「自己意識は、1. 分析的原理に従えば論理的であり、2. 自己直観において与えられている多様なものの統合（総括 complexus）においては形而上学的である。」（本稿151頁）のように、自己意識のはたらきが「論理的な作用Akt」と「形而上学的作用」とに細分化され、それぞれの役割が後に明確に区別される点も、『オプス・ポストウム』における自己意識（統覚）論の特徴の一つである。ただし、こうした二つの作用の相違がより詳細に述べられるのは、第七束のその後の叙述をまたなければならない。

以上のように、ここに訳出した部分がもともと属していたとみられる第七束は、一方では「空間と時間」や「物自体」という概念について、『純粹理性批判』との関係で解釈する必要があり、他方では「自己定立論」について、新たな思想の形成を含んでいると言えるものである。これらのことを勘案して、本稿では第七束の翻訳に着手したわけである。

本翻訳は、『オプス・ポストウム』全体の分量からみれば、ごくわずかにとどまる。上述したように、他言語では抄訳が出ているが、十年以上前に完結した岩波版カント全集（1999～2006年）には『オプス・ポストウム』の抄訳すら含まれていない。日本では論文や著作で『オプス・ポストウム』の一部が、わずかばかり引用されることはあるにせよ、『オプス・ポストウム』そのものの翻訳自体はいまだまったくなされていないというのが実情である。本稿が、おそらく本邦初の『オプス・ポストウム』の日本語訳となるであろう。既述の海外の翻訳状況に鑑みると、たとえ短い部分訳であったとしても、今後の日本の『オプス・ポストウム』研究、ひいてはカント研究に与える影響は決して小さくないと訳者たちは確信している。

なお、本稿では内田が翻訳の前半部分（第十束、第十九紙葉、一から二頁）を、田中が後半部分（第十束、第十九紙葉、三から四頁）を担当し、互いの訳を検討しあいながら試訳を作成した。そしてそれを、二人が参加する研究者グループの定例会である「オプス・ポストウム研究会」で発表し、他の研究者諸氏と討論を重ね、日本語訳の推敲を行い、より読みやすいものに彫琢していった。

最後に、多くの指摘や有益な助言を頂いた同研究会のメンバー全員、とりわけ、丹念に翻訳原稿に目を通して、細部にわたるまでアドバイスを下さった犬竹正幸氏に心から感謝を申し上げたい。なお、本稿は JSPS 科研費 JP16K02150の助成を受けたものである。

- i 最近の研究では『自然科学の形而上学的原理』(1786年)の直後や、『判断力批判』(1790年)以前に、すでにカントは『オプス・ポストゥムム』の構想を抱いていた、との解釈もなされているが、現行のアカデミー版カント全集に収録されている『オプス・ポストゥムム』のほとんどは、1796年から1803年の間にカントが書き記したものである。
- ii ただし、最後の第十三束は、1798年に刊行されたカントの著である『諸学部争い』のための草稿を含んでいるのであり、実質的には12の束の草稿群と言ってよい。
- iii Cf. Eckart Förster: *Kant's Final Synthesis. An Essay on the Opus Postumum*, Harvard University Press 2000, p. 75.
- iv ただし、1787年刊行の『純粋理性批判』(第二版)の「超越論的演繹論」でも、定立という語自体は「私は思惟する」という統覚との関係において以下のように、すでに使用されている。「『私は思惟する』は、私の現存在を規定する作用 Aktus を言い表している。それゆえ、このことによって私の現存在は既に与えられている。しかしながら、いかにして私がこの現存在を規定するのか、すなわち、いかにして現存在に属する多様を私のうちに定立するべきかという仕方は、このことによってはいまだ与えられてはいない」(B157 Anmerkung)。そして、この箇所以後の『オプス・ポストゥムム』の「自己定立論」の萌芽を見るアディッケスの解釈もある (cf. Adickes, op. cit., p. 655)。とはいえ、sich setzen という表現をカントが繰り返すようになるのは、『オプス・ポストゥムム』の第七束以降であることも、また事実である。なお、『純粋理性批判』の「自己触発論」と『オプス・ポストゥムム』の「自己定立論」との関係については、次の研究書の特に第五章を参照されたい (内田浩明『カントの自我論－理論理性と実践理性の連関』、京都大学学術出版会、2005年)。

キーワード：カント、『オプス・ポストゥムム』、自己定立論、直観と概念、直観の多様、自己意識、空間と時間